

第98回山口西田読書会（2015/12/12、於西田旧宅）プロトコル 2016/01/16 南部英彦
参加者：佐野、福田、谷、奈原、千葉、桑原、藤村、岡田、田中、萬納寺、山口、南部（記録者）【12名】【修正版】

一、前回（97回）プロトコルについて

・山口氏の哲学的問い：宗教とは究極的には利己的な営みであるので、現実の生活世界に宗教を持ち込むと、エゴとエゴが衝突して争いが生じる。このように、生活世界を宗教で包んで生きることは、悪いことか否か。

山口氏はさらに「自己の生活世界の範囲内での宗教の実践に止まっているうちはよいが、布教活動などの社会的な実践を伴うと衝突が起こるといふことである」と解説。

これに対しては、次のような議論がなされた。

I 生活世界と宗教

○生活世界（例えば経済など）それ自身にもイデオロギーは含まれているのではないか。行き過ぎた資本主義を抑えよ、科学技術や学問研究よりも人間の生き方を問題にせよというのが、京都学派の立場であった。

↓

○霊性を高めてエゴを滅却するという態度からも、京都学派による八紘一宇の発想などにも繋がる可能性がある。

↓

○京都学派自身の意識としては、ヨーロッパ中心でない本当の世界史を創ろうとするものであった。そこには平和をもたらすために戦争をするという考えも含まれていた。

II 西田における宗教

○西田は、神は宇宙の根本だと言っている。「見神」こそが宗教だとすれば、西田における宗教にはエゴがないことになるのではないか。西田の純粹経験、自己における分裂と統一を繰り返して「見神」へと至るとする考えからは、争いは起こらないと考えられる。

↓

○生命とは何かという観点から宗教を見直すことが大切。平和というのは一種の便法に過ぎず、これに対して生命こそが絶対普遍の窮極目的。戦争は生命の繁殖要求に基づき、生存をかけて行われる。宗教とは宇宙そのものと一体化し、生命を感じ取るものである。

↓

○西田は、宗教の外形（教義など）は有形（分別）の世界にあるため、相対化と戦いが起こるが、宗教の本質（永遠の真生命を得ること）は無形（無分別）であるので、こちらを重視せよと主張する。しかし、この図式それ自身も分別の所産であるから、この考えが絶対視されると争いが起こる可能性がある。

III その他

○一神教の立場では争いが起こる可能性があるが、多神教の立場では争わずに並立可能。

○生活世界において宗教の少数派や性的な少数派が排除される現実があるが、これはおかし。

○人間は生活の中に宗教は必要である。自然の恵みを享受して生きる以上、宗教は生活の中になければならない。

■記録者のコメント

○西田の言う「純粹経験」の極致としての「自己」は、自己の属性（血統、性別、国籍、能力、言語、人生経験…）に基づく「私心」（エゴ）や「偏見」から完全に解放されて宇宙の本体と合一した「公」的な境涯であると理解するが、そうだとすると西田は、万人がそれぞれの挫折や絶望を経た統一の運動の果てにこの境涯にゆきつけるとするのだろうか？もちろん、可能性としては万人に開かれているのかも知れないが、しかし実際に「純粹経験」を体現するためにはやはり何らかの修練（精神集中）などを行う（行える）必要があるのだろうか？あるいはその自己統一の運動は、それぞれの「自ずから然る」過程としてあるのだろうか？

第三編 善 第一章 行為上

■第一段落

○第三編を読み進めるに当たり、まず佐野先生から、次のようなコメントがあった。

これまで、第一編は第二編の注であるという考えに基づき、第二編→第一篇の順に読んだ。第三編・第一章の冒頭に「実在は如何なる者であるかということは大略説明したと思うから、これより我々人間は何を為すべきか、善とは如何なる者であるか、人間の行動は何処に帰着すべきかというような実践的問題を論ずることとしよう」とあるが、この点については、第二編「実在」・第一章「考究の出发点」に、第二・三・四編の主題相互の関係性を述べている。

→「世界とはこのようなもの、人生はこのようなものという哲学的世界観および人生観【第二編】と、人間はかくせねばならぬ【第三編】、かかる処に安心せねばならない【第四編】という道徳【第三編】・宗教【第四編】の実践的要求とは密接の関係を持っている」（【内、記録者】）

○また第一章の後文に「元来真理は一である。知識においての真理は直^{ただち}に実践上の真理であり、実践上の真理は直に知識においての真理でなければならぬ。…我々は何を為すべきか、何処に安心すべきかの問題を論ずる前に、先ず天地人生の真相は如何なる者であるか、真の実在とは如何なる者なのかを明らかにせねばならぬ」とあるところに、〈天地人生の真相のままに生きること〉が最善の生き方であることが示唆されている。

■第二段落

○「行為とは、その目的が明瞭に意識せられている動作の謂である」。

●「行為というのは、外面から見れば肉体の運動【第三段落一行目「外界の運動即ち動作】であるが、単に水が流れる石が落ちるというような物的運動とは異なっている」について、「水が流れる、石が落ちる」についても西田は意志的行動の範疇に含めていたのではなかったかという疑問があがった。

→第三編・第三章「意志」・第四段落では「外界の変化といっている者も、その実は我々の意識界即ち純粹経験内の変化であり…知識的実現と意志的実現とは畢竟同一性質の者となってくる」とある。

→第二編・第四章・第三段落の注に「衝動および知覚などと意志および思惟などとの区別は程度の差であって、種類の差ではない。前者においては無意識である過程が後者においては意識に自らを現し来るのであるから、我々は後者より推して前者も同一の構造でなければならぬことを知るのである」云々とあるところから、ここで西田は、意識内に明瞭に現れてくるものから推して考えるという姿勢で記しているのではないかと。

■第三段落

○「心理学上行為とは如何なる意識現象であるか」を論ずる。

○意志という意識現象の三段階

・動機（一種の衝動的な感情で意志を動かす力）→欲求（動機に目的観念が伴ったもの）→決意（欲求が競合する場合などにおける観念統一の終結）

○「行為の要部は実にこの内面的意識現象たる意志にあるので、外面の動作はその要部ではない」。

●「意識の内面的活動が盛になると、始より意識内の出来事を目的とする意志が起こってくる」とは具体的にどのような事象を指すか。

・(例) 的中を度外視して紙くずを投げる。／眠る（意識を消す）ために、意識内において羊の数を数える。(→精神集中など)

■第四段落

○心理学上から見れば、意志は観念統一の作用であり、連想（観念結合の原因が外界の事情に存する場合で受動的）と統覚（結合の原因が意識内にある場合で能動的）に分けられる。

■第五段落

○意志の統覚作用と他の統覚作用との関係

→想像と意志とを比較すると、想像の目的は自然の模擬で、意志の目的は自身の運動だが、意志の前には想像するを要し、想像の過程に意志が働くというように、両者は程度の差であり性質の差ではない。

●「想像も美術家の想像において見るが如く入神の域に達すれば、…物の活動が直に自己の意志活動と感ぜられるようになるのである」とある「入神」について、「入神」と「見神」は同じことかという疑問が挙がった。「見神」については若干垣間見る程度のものではないかという意見と、「入神」は技術に集中する際に起こるフロー状態のようなものであり、絶望を経た実存的状況にあると考えられる「見神」の方が上ではないかとする意見とが挙がった。これについては今後継続して考えていくことになった。

【哲学的問い】

・西田の言うように、自己の内的な意志に基づく運動のみならず、外的自然世界の運動(ここでは他人の存在・運動すらもこれに含めると考えられる)もが、純粹経験に基づくとするならば、畢竟、純粹経験の極致においては、見神する自己以外の何者も存在しないのではなからうか。そこでは他人の純粹経験(「他人の夢」)すらも、自己の純粹経験(「自己の夢」)の内部に包摂されてしまっているのではないか。他人の純粹経験が自己とは独立に存在しうる根拠について、西田はどのように説明しているだろうか。

・また他人の純粹経験が自己とは独立に存在すると仮定した場合、自己の純粹経験の内容と他人のそれとが一致することはどのようにして確認されるのだろうか。

・西田の純粹経験の思想は独我論的色彩が濃いのではなからうか。